

O-1-1

高齢者における吸入薬の適正使用及びコンプライアンスの向上を目指して

○箆島 清史

タイヘイ薬局牛津店

【目的】従来より、多くのメーカーより吸入器による治療薬が発売されているが、それらの使い方は多岐に分かれており、特に自宅でも指導を守れているか疑問に思うことが多く、吸入指導における問題点の把握と、それに伴う改善を実施し、今後の吸入指導へ活かすことを目的とした。

【方法】自店舗で取り扱う処方箋の中で吸入器による治療を継続している患者 20 名を対象に吸入指導時の問題点をヒアリングし、その結果をまとめた。そこから得られた問題点を 5 つに分類し、より患者に理解しやすい吸入指導となるような対応を考え、次回指導に役立てた。

【結果】H22 年 1 月から H24 年 4 月までの集計結果より、吸入器を用いた治療薬剤は吸入方法でおおまかに 8 タイプに分けることができた。ヒアリングにより、その場での指導では問題がなくとも、自宅に戻っての確認が無いケースが見られた。また、指導直後は正しく吸入できて、期間が長くなるにつれ、指定回数以上の吸入やステロイド吸入後のうがいを怠るなどの判断を行う患者もあった。以上から吸入指導内容の改善、自宅での吸入の確認方法の模索、主治医との継続的な連携の必要があることがわかった。

【結論】高齢者が吸入指導をより理解し、自宅でも正しい吸入ができるようにするには

1. 薬剤師が実演するだけでなく、患者にも体験させる。
 2. 業務が忙しい時は、待ち時間を利用し、デバイス等を用いて映像と音声で説明を事前に受ける。
 3. 初回の指導以降も、主治医との連携を密にする。
- などが今回挙げられた。

現在、呼吸器疾患はやや減少傾向にあるものの、喘息患者は増えており、その数は推定 400 万人とも言われ、吸入薬の治療は増加することが予想される。また、吸入指導は薬局で行うのが望ましいという意見も多く、継続的な効果を期待するには、薬剤師から処方医への連携も今後強化していかなければならない。今回取り扱った、吸入手帳の普及も視野に入れたい。

O-2-2

漢方製剤による副作用の症例検討

○山田 裕介

(株)タイヘイ薬局

【目的】現在、漢方薬は医療機関で頻繁に処方され、ドラッグストアなどで容易に手に入れることができることから、われわれの日常において非常に身近な薬になっている。これらの理由として、漢方薬は非常に薬効がマイルドであり、副作用も軽微であるという認識がある。しかし、そのような副作用が少ないと言われている漢方薬にも重大な副作用が報告されている。全漢方薬の半分以上を占める副作用に偽アルドステロン症があり、その副作用はカンゾウという生薬が引き起こすもので、主な症状は血圧上昇、低カリウム血症である。現在、私が勤務している薬局に、偽アルドステロン症の疑いがある患者が来局された。今回の症例を解析し、漢方薬の適切な服用、偽アルドステロン症に対する処置を調査するために、症例検討を行うことにした。

【方法】今回の検討では、偽アルドステロン症の疑いがある患者から、漢方薬服用の前後と、その後の処方修正後の検査結果を拝見させていただき、検査値の経時的推移を調査した。患者からは学会で発表することの同意を得ている。

【結果】漢方薬の服用により患者の収縮期血圧値は 180mmHg まで上昇したが、漢方薬の服用を中止し、カリウム保持性利尿薬を投与することで、収縮期血圧は 130mmHg まで下がった。現在も経過は良好である。

【結論】今回の症例では、患者と密に接することで、症状や訴えに気づき早期に発見できたと思う。今回の検討結果より、カンゾウを含む漢方薬を服用している患者には、自宅での血圧測定を促し、血圧手帳を配布することにした。血圧手帳の配布は患者に好評である。

患者指導における残薬確認の見直しとその結果

○吉田 貴大、嘉村 律子、築瀬 淳一
タイヘイ薬局上峰店

【はじめに】平成24年度の調剤報酬改定において、調剤基本料の見直し・薬学管理料の要求事項の変更など保険調剤薬局に求められる業務は年々増えてきている。それを受けて当薬局では薬局業務の質の高め、患者サービスを向上させるために取り組みを行っている。今回は平成24年度調剤報酬改定における項目の中で“残薬確認”に重点を置き、検討を行った。日々行う服薬指導において、服薬コンプライアンスの悪い患者がたびたび見受けられ、患者の治療の妨げになることはもとより、残薬が存在するうえでさらに薬剤が処方されることがあるために医療費も増加してしまう。この問題を解決するために薬歴の残薬確認状況をもとに薬剤師間で検討を行い、患者指導における質の向上を図ることを目的とする。

【方法】電子薬歴の残薬確認項目をもとに各患者における残薬確認状況のデータを収集。そのなかで残薬確認方法に関して改善の必要がある患者、または服薬状況の改善の必要のある患者を症例として選択し、改善方法について薬剤師間で検討会を行う。検討会に参加する薬剤師は3名。3名はそれぞれ検討会をするにあたって適した患者をそれぞれ選択し、事前に資料を作成して参加者に配布。パワーポイントを用いて1人持ち時間8分で発表を行い、発表後薬剤師間で検討を行う。

【結果】今回の検討を終えて患者指導における問題点を明確化させ、薬剤師間で共有し服薬指導の充実を図ることができた。また、検討会に新人を参加させたことにより新人薬剤師のレベルアップを図ることができた。

【考察・結論】今回検討を行った事例は一部であり、他にも事例は多々存在する。それらに対しても解決を図るため今回の取り組みを継続して行っていき、患者に対してより良い対応ができるよう努力していきたい。

当局における薬剤師と事務職員の連携による業務効率化の検討

○北島 孝臣¹、副島 広幸²、今村 真利¹
佐藤 仁美¹、古田麻衣子¹、田中 裕士¹
中野 法子¹、田中 美帆¹、徳富 陽香¹
中島 有紀¹、吉田 愛¹

¹(株)大平 タイヘイ薬局メディカルモールおぎ店

²(株)大平

【目的】当局では、薬局内の全スタッフ(薬剤師、事務職員)に対して情報を共有するために行っているミーティングで困った事例や気になる事例を報告し、改善しようと試みているが、現状解決されていない事例がある。患者ニーズが最も高いと言われている待ち時間の短縮である。待ち時間にばかり気をとられ、患者に対する服薬支援の時間が短くなってしまえば、本来の保険調剤薬局の役割が果たせなくなってしまうため、それ以外の業務を効率的に行う必要があると考えた。当局でオープン時から行われている業務を含め、今回の検討で新たに取り入れられたことを紹介する。

【方法】業務効率化のために以下の項目を試みた。1. 処方入力にバーコードを用いた入力方法を採用。2. 最新の調剤機器(水剤自動分注機、一包化自動分包機)の導入。3. フロア係の設置。4. 調剤棚の工夫。5. 適切な在庫管理、薬の補充、予製などの事前準備を確実にを行う。

【結果】調剤棚の工夫、適切な在庫管理、薬の補充や予製などの事前準備を確実に行うことで調剤時の時間ロスがなくなった。処方入力をバーコード入力にすることでスピーディーに正確な入力ができるようになり、調剤機器との連携もスムーズになり結果として、処方入力→調剤までに必要とする時間が大幅に短縮された。

【結論】業務を一部機械に任せることで結果として業務の効率化が実現された。その分、他の業務に時間を充てることができ、フロア業務、在庫管理の補助などを事務職員に任せることができるようになった。結果的に薬剤師の業務負担は大幅に減り、調剤、鑑査、投薬、医師への疑義照会や薬歴入力などの業務に専念することができるようになった。これは、薬剤師と事務職員の連携、経営者の現場への理解により実現したものでこれを継続、発展させていくことが今後の課題であり患者満足度の向上につながるのではないかと考える。

調剤薬局における効率的在庫管理について

○川原 恵¹、中野 紀子²¹タイヘイ薬局Aコープ店²タイヘイ薬局メディカルモールおぎ店

【目的】近年の調剤報酬改定では、厳しい改定が続いている。また、薬価差益も到底期待できない状況である。また、ジェネリック医薬品の備蓄増、電気料金などの固定費等も増加傾向にある。その中で調剤薬局として、生き残るためには、業務を全般的に見直し、とりわけ不良在庫の解消と、適正在庫の業務が最も重要な要素と考えられる。また、将来的には卸さんからの配達費用の徴収も一部ささやかれている。現に昨今の医薬品の医療機関や調剤薬局への配達は、外注が多く見受けられているのが現実である。また、至急配達に至っては非常に厳しい現実がある。これらの現実と将来に備えることが効率的在庫管理につながると思われる。当社は原則薬品の発注は、月1回である。当月や前月の薬剤集計を参考に、月末に翌月の1ヶ月分をまとめて発注する方法を取っている。新薬や、在庫していない薬品は、そのつど随時に行う。また、卸さんへの支払は、月末締めで翌月の10日に現金決済が当社の方針である。

【方法】門前以外の医療機関からの薬品管理を、次回の来院日の把握で広域カレンダーに書き込み無駄のない在庫管理の実施。メインの医療機関からの在庫管理の情報を職員で共有化を実施した。

【結果】従来は、在庫管理不足で、月の半ばでの発注が平均して約20回と多く見られたが、広域カレンダーでの在庫管理の実施と在庫管理の情報を職員で共有化の実施で途中発注が平均5回と激減できた。また、適正在庫にも繋がった。

【結論】薬剤師、事務職薬局スタッフに、在庫管理意識が芽生え、一部の職員の在庫管理から、スタッフ全員での在庫管理の重要性への、理解が進み、在庫イコール現金の現状把握ができるようになった。広域カレンダーでの在庫管理は、近年長期投与が多数見受けられるが、本当に必要な薬品が、いつ在庫すればよいのかが一目了然で分かり業務の効率化が図れた。